

由井正臣先生のご逝去を悼む

安 在 邦 夫



本学名誉教授由井正臣先生は、二〇〇八（平成二〇）年四月四日肺ガンのためお亡くなりになりました。享年七五歳でした。

先生は一九三三（昭和八）年一月一日、長野県南佐久郡川上村大字御所平に生まれました。一九五二（昭和二七）年四月長野県立野沢北高等学校から早稲田大学第一文学部に進み、一九五六（昭和三一）年三月同学部史学科国史専修を卒業されました。翌年八月国立国会図書館に入館、一九六八（昭和四三）年三月同図書館を退職、四月より駒澤大学文学部に赴任されました。そして一九七三（昭和四八）年四月早稲田大学文学部に助教授として迎えられ、

一九七八（昭和五三）年四月教授に昇任、二〇〇三（平成一五）年三月定年退職されました。早稲田大学在職中、東京大学・一橋大学などに非常勤講師として出講されたほか、NHK市民大学講師、三鷹市教育委員会委員などを務められました。

ご退職後も研究者としての生活は変わらず、二〇〇四年一月には、アジア太平洋戦争中の日本軍の占領支配の跡を辿る中国雲南省調査に出かけられました。その折、先生は身体の変調を感じになられ、帰国後精密検査を受けられました。その結果肺にガンが見つかり手術をされました。以後治療に専念され、一時は発病前と変らぬまでに体調も回復されました。しかし、ご家族の手厚い看護と薬石も効無く、遂に永眠されました。まことに惜しみても余りあり、衷心哀悼の誠を捧げるものであります。

先生は、敗戦を契機に一変した価値観の様態などを冷静に受け止め、日本を破滅に導いた軍国主義の形成、西欧民主主義の歴史などへの関心を深めました。そして第一文学部入学後は深谷博治先生の指導を得つつ、学生歴史学研究会での活動を通して、遠山茂樹・山辺健太郎先生らより明治維新史・日本帝国主義史などの薫陶を受け、卒業後は大久保利謙・藤原

彰先生らとの研究交流を深めて、独自の研究領域の追究に邁進されました。その学問的業績は多岐に涉りますが、なかでも第一に、軍部およびアジア太平洋戦争史の研究、第二に、田中正造の研究に多大な功績を残され、当該分野・人物研究における第一人者の地歩を築かれました。権力と民衆とのバランスの取れた構造的把握は、由井史学の特徴の一端を伝えるものですが、加えて読みやすく叙述された『大日本帝国の時代』、『田中正造』は、特に名著として誉れ高いものです。また、史料の操作や解読能力、歴史を見る確かな眼力は、史料集・全集・辞典・編纂などのお仕事に如何なく発揮されています。先生はまた、教育者としても大きな足跡を残されました。現在、アジア太平洋戦争史の研究、石橋湛山や田中正造の研究、さらには人権史に関する研究等々において、先生の教えを受けた方々が第一線で活躍されていることに、そのことはよく示されています。

先生はお酒を嗜み、スポーツや音楽・自然をこよなく愛されました。その趣味の広さと度量あるお人柄を慕い、多くの研究者・学徒が先生のところに集いました。スポーツでは特にラグビーに情熱を燃やされ、ガンで肺を冒されてからも、「肺よりもラグビー狂の方がよほど深刻」と自ら述べられたほどでした。音楽ではクラシックを好み心身の疲労を癒す糧としておられました。軍部や戦争史に関する研究は、新史料の発見や国内外の現況を反映して、見直しや新視点からの分析・検証が進められております。発想の目新しさや言葉の巧みさなどが何かと注目され話題となる昨今の研究状況のなかで、厳密な史料批判に基づく重厚・精緻な論証を精髓とする先生の学風は、現在ますます輝きを増しているように思われます。そのことに思いを致します時、改めてかけがえない指導者を失った悲しさを覚えます。心から先生のご冥福をお祈り申しあげます。